短編　　1

story　by aono　　photo　by hiros

空が僕を呼んでいる……。
頭上にひろがるコバルトブルーの空を見上げると、和馬は畑の向こうに見える森を目指して歩き始めた。
見えぬ手が僕を招いている……。
風に背中を押されるように、和馬は足を速めた。前方の常盤色の森が近づいてくる。　十年程前、この森へ最初に来たときも通った道は、ほとんど姿を変えていない。
小学生の頃は、ひと夏をこの北の地に住む叔母の家で過ごすのが習慣だった。　都会育ちの和馬にとって、見るもの全て珍しく、自然との出会いは新鮮な体験だった。　飽きることなく、一日中自転車に乗って、この辺りを走り回っていた。思い出がある。
「森の中へ行ってはだめよ」　叔母は口癖のように和馬に注意を与える。
「どうして？」　和馬は問い返す。　森は魅惑的だ。
「迷ってしまうと帰れなくなるから、森の中はだめなの。　行きたければ叔父さんが連れて行ってくれますよ」
和馬の心の中で、森への憧れが育っていった。　大好きな叔父と叔母だが、森へは一人で行きたい。　そうでなければ冒険にはならない。
小学校五年の夏、和馬は誘惑に負けて、森へと自転車を走らせた。　六年生の夏は塾の講習で忙しくなる。ここには来れないだろう。　最後のチャンスだ。
森の入り口で自転車を降りると、森の中へと足を踏み入れた。　道は狭くでこぼこしていて、とても自転車では行けそうもない。　生い茂った木々の葉で、だんだんと暗くなる森に、和馬は心細くなってきた。

「やっぱり、おじさんと一緒に来ればよかったかな……。　いや、僕はもう大きいんだ。　ひとりでだいじょうぶさ」　自分に言い聞かせながら、足を進める。

　薄暗い森の中では、ちょっとした物音や、葉の擦れる音にびっくりする。　遠くに鹿の姿を認めてほっとし、小鳥のさえずりに耳を澄ます。　枝の間から差し込む日の光に励まされ、和馬は思い切って森の奥へと入っていった。

　どのくらい歩いただろうか、急に視界が開け、目の前に青い湖が出現した。　空を映したような青い水。　和馬は湖畔へ向かって駆け出そうとした。

だれかいる……。　水の中に人がいる……」　和馬の足が止まった。

　慌てて木の陰に身を隠す。　小枝につかまっている小さなリスが、和馬を見てさっと隠れた。

/

　湖の中央に人が立っている。十六、七の少女だ。　白いドレスを着たまま、腰まで水につかっている少女を、和馬はしばらくの間、ぽかんと眺めていた。

　やがて少女は水に足を引っ張られるように、垂直に湖面の下へと消えていった。

　和馬は、少女の消えたあたりを目を凝らしてみたが、水面は静かで、そこに少女がいた痕跡はなにもない。　水は揺れもせず、輪も描かず、少女を飲み込んだのだろうか。　呪縛を解かれたように、和馬は湖に向かって一歩踏み出した。

　まぼろし？

　あれはまぼろしだったのか、そう考えて、和馬は自分の顔がほてったのを感じた。

　女の人のまぼろしを見ちゃった……。　なにか悪いことをしたような気分になった。　和馬は踵を返すと、来た道をあわてて戻った。　リスが木の上から、じっと和馬を見つめていた。

あれから十年、和馬は二十歳になった。　あのまぼろしの正体を確かめたくて、またこの地にやってきた。　中学、高校の夏休みは勉強に忙しく、叔母の家へ来る機会はなかったが、大学生となった今、行動は自由だ。
「まあ、立派な大人になって……」 ほとんど涙ぐみそうになって、叔母夫婦は和馬を歓迎した。
「ほんとに久しぶりね。ゆっくりしていってね」
　和馬は小さな罪悪感に襲われた。まさか、まぼろしの少女に会いに来たとは言えない。

　森は変わっていなかった。 足を一歩踏み入れると、木々の葉がサワサワと揺れた。 昔と同じように、枝の間から差し込む光が、和馬を導いてくれる。
「あれ？」
　和馬は足を止めた。湖のそばに、十年前はなかった小屋が見える。
「だれかいるんだろうか……」
　ゆっくりと小屋に近づく。 丸太で出来たその粗末な小屋には小さな扉と窓がついているだけ。丸太の間は隙間だらけで、とても人は住めそうもなかった。
　和馬は窓からそっと覗いてみた。 中は暗くて何も見えない。
「見張り小屋みたいなものかな……」
　不審者と思われて、詰問されるのも不愉快だが、人のいる気配はない。
ぐるりと小屋の周りを巡った。
　池の周囲を探索しようと、小屋に背を向けたときだった。
「何しに来たの？」 と問う声がした。
　振り返ると、そこには焦げ茶色の洋服を着た小柄な少年が、丸い目を大きく見開いて和馬を見つめていた。
　驚きのあまり、口を開けたまま和馬は声も出ない。
「何しに来たの？」　少年は重ねて問いかける。
「……きみ、いったいどこから湧いて出た……」　と言いかけて、湧いて出たではまずいだろうと、言葉を飲み込んだ。
「あの家に住んでいるの」　少年は気にする風も無く丸太小屋を指さした。
「あの家？　住んでる？」
　和馬は少年と家を交互に見比べた。
「そう、あの家」
　和馬は大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出した。　少年に話を合わせるしかないと決めた。
　少年を怖がらせないように、できるだけ優しい声で問いかけた。　オレ、誘拐犯みたいだぜ、と心の中で嫌悪を感じながら。
「誰と一緒に住んでるの？」
「ひとりで」　と少年は答えた。

　和馬は途方にくれた。　この風変わりな少年をいったいどうしたらいいんだ？　ここに置いて一人で逃げ帰るわけにもいかない。　かといって、連れて帰って本物の誘拐犯にされてはかなわない。
「アナタを前に見たことがある」　突然の少年の言葉に、和馬はますます困惑した。
「僕を見たことがあるの？　いつごろ？」
「十年位前」
「十年前？　君はまだ赤ちゃんじゃないか」
「赤ん坊じゃないけど、小さかった」
和馬は、ますます混乱してきた。
「ええと、赤ん坊じゃないけど、小さかったって？」
「そう」
「君は今いくつ？」
「いくつだろう。　おじいさんだよ」
「ふざけないで。　見たところせいぜい十歳だ。　僕と会った時は、まだ生まれたばかりという事になる。
「うーん。　そのとき一歳だけど、十六歳くらいかなぁ」
　和馬の忍耐も、限界が来た。
「僕をからかっているんだね。　さあ、家まで送ってあげるよ。　本当の家はどこなの？」
　いらいらした気持ちが声にでたのだろう。　少年は急におびえた目をして、小屋に駆け込んでしまった。　怖がらせたらしいと、少し後悔して、和馬は小屋の扉をノックした。　返事は無かったが、ノブを回すと扉はきしんだ音を立ててあいた。　中は暗く、小さな窓から自然の光が入ってくるだけだ。
ごめんよ。　怖がらせるつもりはなかったよ」　と声をかける。
　少年はたくさんの木の実に囲まれて、部屋の隅でうずくまっていた。　その隣に和馬は座った。
「僕ばかり質問して、君の問いにまだ答えていなかったね。　ぼくはね、まぼろしを確かめに来たんだ」
「まぼろし？」
「十年前に見た白いドレスの少女のまぼろしだよ」
「まぼろしじゃない。　あれはコトミだ」　少年はきっぱりと言った。　「コトミはブレスに騙されて、湖の底に行ってしまった」　少年は黒い瞳を伏せた。
「ねえ、君。　君が知っていることをゆっくりと話してくれないか？　僕は少し混乱しているようだ。　よかったら君の名前も教えて欲しい。　僕は和馬、カズマだ」
「コトミはいつもキューティーと呼んでいた」
「君の事をキューティーと？」
　少年は頷いた。　そして、たどたどしくはあっても、真剣に話し始めた。　和馬は何回も聞き返しながら、少年の話に耳を傾けた。

　キューティーはいつもコトミのそばにいた。　時には肩に乗って散歩をし、コトミが花を摘んでいるときは、その周りで飛び跳ね、退屈すると枝を伝って湖まで先回りをする。
　休日にはコトミが必ずその湖に行くことは分かっていたから……。
　コトミの家は、湖から約二キロほど離れた小さな村のはずれにあった。　広い土地に少ない人口の村々では、友達の家はどこも遠く、学校から帰宅してからは、庭に顔を出すリスのキューティーが遊び友達だった。

　十六歳になったある春の日、湖でコトミはブレスと出会った。　肩に乗っていたキューティーは危険を感じて、キッ！　キュルキュルと警戒の声を出したが、コトミには通じない。
　仕方なく、グルーグルー、グルルルと威嚇音を出した。
　コトミは　「何を騒いでいるの」　とキューティーをそっと地面へおろした。　でも目はブレスに釘付けだ。
　キューティーは気がきではない。
「その男は危険、人間ではない」　とコトミに知らせたい。　動物なら知っているブレスの正体が、人間にはわからない。
　キラキラと輝く髪と、青い湖の色の瞳をもつブレスに人間たちは夢中になる。
　この森に住む動物の母たちは、生まれてきた子供に必ず教えることがある。
　――湖には近づかないこと。　そこには美しいけれど寂しい妖精のブレスがいて、いつも誰かを求めている。　美しさに惑わされてはいけないよ。　十年の間に生きる力を吸い取られ、枯れ木にされて、湖の水の中に立つことになるんだよ。　ブレスは水の中では残酷な妖精に豹変するんだからね――

　キューティーの心臓は心配ではちきれそうだったが、コトミは休日になると湖へ足を運び、ブレスと過ごすようになった。　夏休みには毎日のように湖へと向かう。　青い瞳でコトミの眼を捕らえ、ブレスは美しいバリトンで話しかける。　コトミの顔にはうっとりとした表情が浮かんだ。

　そんなある日、真剣な顔でコトミがキューティーに話しかけた。

「ねえ、キューティー。　私はブレスと一緒に行こうと思うの。　ブレスは寂しがり屋なのよ。　一人では生きて行けないんですって。　だからね、キューティー、ブレスには私が必要なの」

　もちろんキューティーはグルーグルー、グルルルと声を出して反対した。　コトミには賛成と受け取られたのかもしれない。

「それでね」　とコトミは話をすすめる。　「私にはもう人間の体は必要なくなるらしいから、あなたに私の体をあげる。　そうすれば長く生きられるでしょう？」

　キューティーはキッ！　キッ！　キュルキュルキュル、キュルキュルキュルと警告の叫びを何回も発した。

「喜んでくれてうれしいわ。。　早速ブレスに伝えておくわ。キューティーはきっと茶色の可愛い男の子になるわね」

　そしてその日がやってきた。

　コトミはキューティーを肩に乗せ、白いドレスを着て湖に向かった。　湖ではブレスが微笑を浮かべて待っている。

　キューティーを降ろすと、コトミはブレスと手をつないで湖へ向かった。

水の上を歩いて湖の中央まで行くと、まずブレスが湖の中へ消え、コトミも足から垂直に水の中へと消えていった。

　キューティーはよじ登った木の上から、ただ見守ることしかできなかった。

　和馬が目撃したのは、その瞬間だったのだ。　木の上からリスが見送っていたのを和馬は思い出した。
「あれが君だったんだね……」
「うん。　次の日、起きたらこの小屋にいて、人間になっていた」
　リスが十年も生きられるのは、人の体を得たからだ、と和馬は理解した。
「コトミは水の底で生きている。　死んだらわかる」　キューティーは真顔で言う。
「どうしてわかる？」
「ボクの体が無くなる。　たぶんもうすぐ。　母さんが言ってた。　ブレスは十年ごとに相手を探すらしい。　この夏十年になった」
「キューティーにとって、幸せな十年ではなかったね」　和馬は勝手に人間にされたリスを気の毒に思った。　望んで人間になったわけではないのに……。
「そんなことない。　キューティー幸せ。　水の中のコトミを思いながら過ごせた十年、幸せ」
　和馬はキューティーをギュッと抱きしめた。

　叔母の家へ戻ると、夕食が待っていた。
「遅かったのね、素敵なところがあった？」
　叔父や叔母と食卓に着きながら、和馬は切り出した。
「叔母さん、聞きたいことがあるんだけど」
「何？」
「森の中に真っ青な湖があるでしょう？　知ってる？」
「あら、森へ行ったの？　あそこは入ると迷う人がいるから危険なのに……。　湖のことは知っていますよ。　とても美しい湖だそうね」
「その湖にまつわる伝説か何かあるのかな」
　それまで黙っていた叔父が口を挟んだ。
「湖の伝説と言うわけではないが、この近辺の村々で、十年に一度子供がいなくなるという噂なら聞いたことがある」
「十年に一度？　女の子ばかり？」　コトミの姿を思い出して和馬は尋ねた。
「いや、女の子とは限らないそうだ。　まるで神隠しにあったように消えてしまうらしい」　叔父の顔が曇った。　「二度と帰ってこないそうだから、親はたまったものじゃない」
「小学生のときは心配でね、森へ行ってはいけないと言ってたでしょう？　森へ入った子もいるらしいのよ……」　叔母は眉をしかめた。
「僕はもう大人だから、今なら大丈夫だよ」
「そうだと良いけど……」
「ハハハ、和馬君はもう二十歳だ。　立派な男だ。　さあ、冷めないうちに食べよう」

　小屋は既に無く、地面の上に積まれた木の実の間に、小さな骨がいくつか落ちていた。
　和馬はそっと骨を拾うと湖畔に埋めた。
　向こう岸には、昨日まではなかった白い枯れ木が、ひっそりと水の中に立っていた。
「さようなら、キューティー」　別れを告げて、湖に背を向けて歩きだしたが、　何かの気配を感じて振り向くと、湖の中央に輝く髪を持った青い瞳の美青年が手招きをしている。
「こっちに来て私の話し相手になってくれないか」
　和馬は、思わず湖に向かって一歩を踏み出した。
　ブレスは大きく両手を広げた。

　その湖は今も森の奥深く、静かに青い水を湛えている。

-fin-